

「かさねる」

■エピソード

子どもたちが独立してからは、久子さん夫妻は二人で食事に出かけることが多くなりました。その日も、ゆったりとおそい夕食を楽しんでいました。

しばらくすると、まだ小さな子どもたちを連れた若い親たちが入ってきました。最初はおとなしく食べていた子どもたちも、だんだんと歩きまわったり、食器で遊んだり、いすに寝ころんだりしはじめました。でも、親たちには注意するようすはありません…。

その姿を見ていた久さんは、食事を楽しもうという気持ちも消えてしまったのです。

次の日曜日、孫を連れてやってきた昌也さんと冬美さんに、久さんはさっそくこのことを話しました。

昌 也：「おそい時間に子どもを付き合わせるのをおかしいと思うけど、何かの事情はあったのかもしれないよ。生活のスタイルだって昔とはかわっているんだし。」

久 子：「でも、子どもも疲れていてかわいそうだったわ。」

冬 美：「みんなでいっしょの食事なら、子どもがよろこぶと思っているんじゃないかしら。」

久 子：「子どもには子ども

の生活のリズム
があるのよ…。
それに、テーブル
には熱いものも
あったんだし、
やけどしたら
どうする
つもりなん
でしょう。」





話しあいのポイント

● 久子さんと昌也さん、冬美さんのやりとりについてどう思いますか？

● あなたが子育てをしていたころ（子どもだったころ）と比べて、子育てや親について変わったと感ずること、変わっていないと感ずることはなんでしょう？

● 変わらないと感ずるものを、若い世代にどう伝えればよいでしょう？